

実践報告書②

自分で進める「テーマ単元学習」で自己評価能力を涵養する
(5年生の実践報告)

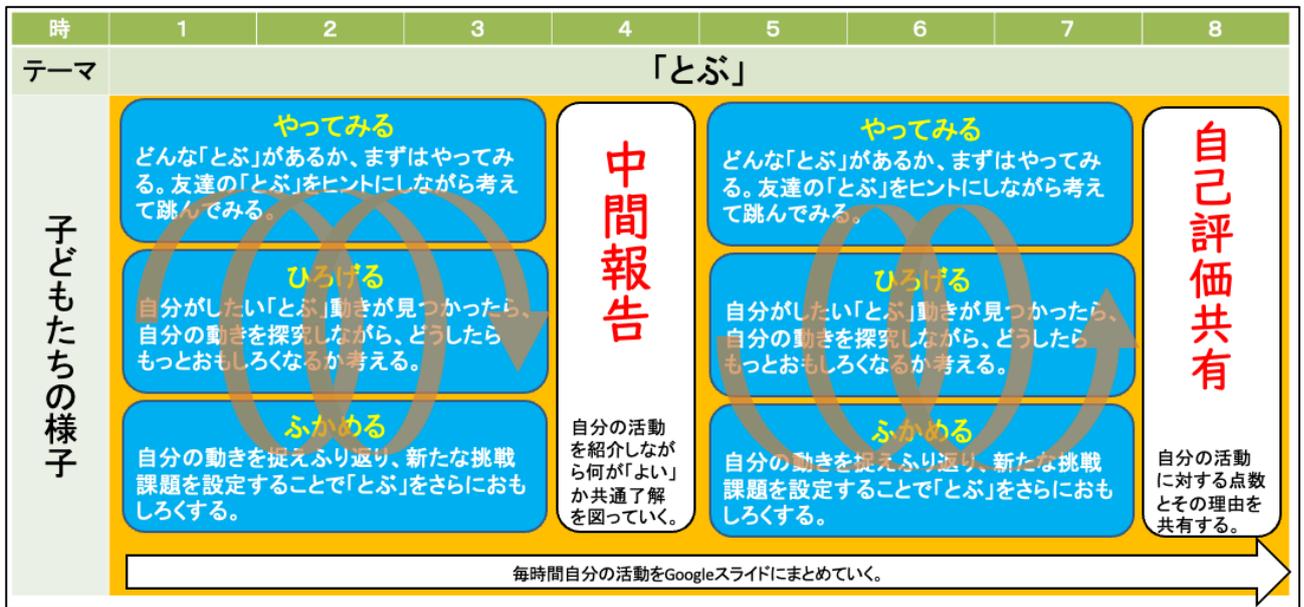
附属小学校 和氣拓巳

1. 実践について

(1) 実践の概要

本実践では、普段から実施しているテーマ単元学習について、自ら学びを進める中で、自己を評価しながら学びを進める点について着目した。具体的には「とぶ」という運動を共通のテーマとし、自分のしたい「とぶ」動きについて探究していく学習の中で、学習半ばにおいて「中間報告」と学習の最後に「自己評価共有」を取り入れた。

【図1：単元構成図】



「中間報告」とは、単元前半の自分の学びについて報告する中で、どのような活動が「よい」活動なのかについて子どもたちで話し合うことを目的とした。多様な学び観を共有できたり、互いの活動を批評し合うことで、自分の視点を新たに設けることができると考えた。

「自己評価共有」では、これまでの自分のふり返りを中心に、自身の活動にどんな意味があったのか、中間報告会で話し合った観点に沿って自分の学びはどうだったかを自ら点数をつけることとした。しかし、むしろ点数をつけることよりも、その理由について詳しく語ることに重点を置いた。「自己評価共有」の中で、他者が自己評価についてどう思うかを少人数グループで共有する。その中で得た気づきを参考に自身の自己評価を書き換えることもありうる。

2. 具体的実践

① 実際の「とぶ」授業

「とぶ」というテーマを教師が提示し、学習がスタートした。子どもたちが様々な「とぶ」を連想し、跳び始めた。何か障害物を跳び越す子や、高いところから飛び降りて着地する子など様々であった。



【写真1：子どもたちの「とぶ」様子】

子どもたちは、自分のできそうでできない「とぶ」遊びを考え、場を設定し跳ぶ。そしてまたこつを掴み、また場を変化させながら自分のからだについて扱い方を考えているように見えた。

② 中間発表

4時間目に、これまでお互いが「とぶ」について探究してきたことを共有した(写真2)。自分のこれまでの変化や感じと気づきを共有する中で、互いにアドバイスをし合いながら、誰の学びが「よい」と思ったか、その理由を共有した。表1は子どもたちの意見を教師が分類したものである。



【写真2：中間報告の様子】

【中間報告で出た「よい」視点】			
〈目標設定について〉	〈ふり返り方について〉	〈取り組み方について〉	〈結果について〉
<ul style="list-style-type: none"> ● 次の目標を考えているか ● 常に挑戦しているか ● 難易度を上げ続けているか 	<ul style="list-style-type: none"> ● 自分の変化・感じたことをふり返ることができているか ● 感覚を探っているか ● こつの分析ができているか 	<ul style="list-style-type: none"> ● 協力しながら取り組んでいるか 	<ul style="list-style-type: none"> ● できなかったことができるようになったか ● とぶ距離が伸びているか

【表1：中間報告の様子】

表1を見てみると、目標設定、ふり返り方、取り組み方、結果について子どもたちが関心を持っているのがわかる。目標設定について特徴的なのは、目標を達成しても、次の目標に向かう方が良いと考えている点だ。何かを達成したらそこで終わりではないという価値観が見える。ふり返り方については、体育ならではの視点で、「感じたこと」、「感覚」、「こつ」などのからだをもとにしたふり返りを重視しているようだ。取り組み方については「協力」という言葉が出ているが、個々で学びを探究している中でも、お互いのつながりを感じながら学びを進めていることが窺える。結果については、体育学習の特性か「できるようになったか」という視点を持っていることがわかる。生涯スポーツという視点に立てば、何かがうまくなること以外にも運動する意味を見出すことはできるが、自分のからだを「とぶ」という動きを中心に育てていくというテーマ設定により、過程と結果、両方ともを大事に学びを進めていきたいという子どもたちの思いを感じる。

子どもたちから出た一つ一つの「よい」視点について共有し、単元後半について自分はどのように学びを進めていくかを考えた。この中間報告会での活動が自分では気づかなかった学習の視点を持つきっかけとなり、自己修正的に学びを進めていくために必要な自己評価活動を促したように思う。

また、互いの学習を報告する中で、「それってもっと〇〇したほうがいいんじゃない。」など批評し合う時間もあった。互いの学びについて批評し合うことで、また自分では気づかない視点に気づき学びを進めることができたのではないだろうか。

③ 自己評価共有

⑧ 自己採点 96点

【今までやってきて成長した点は...】

最低記録 15cm (一番最初) → 最高記録 (5回目) 28cm

【90点の理由】自己評価点数 …90点だと思う (正直な気持ちで)

私はなるべく毎回記録してこれたし、どこで成長しているか一つ一つ振り返ってたと思う。「ちょっといいよ」ってみんなは思うかもしれないけど、正直に、④では、仲間の意見もしっかりメモしたり⑦ではみんなのを見てみたり…。私は私なりに頑張ったから、精一杯やったと思うから90点。

【残りの10点がかけている理由】

⑦でみんなのことも見に言ったのは和氣先生が助めてくれたから。じぶんのことに夢中になりすぎないで、人のことも見てみたほうが、もっとよくなるかもしれない。視点がせますぎた。

あとはちょっとPCいじっている時間が結構あったかも。別にこのスライドを強化させようとするとしかしてないけど、①とかは目標決めるだけで時間取りすぎたし。まあ、本気で決めようとしたんだけどね。判断が遅かった。でも今回の自己評価には時間を使うべきだと思うから。良かったと思うよ。

【写真3：A児の自己評価】

自己評価 68点

理由：最後の最後で5段を飛べたが、そのあとどうするかを考えていなかった。

だから100点満点ではない。100点にいかなかった理由2つ目はトランポリンがなくてもできる練習を考えていなかったから。目標が同じ人達は考えてバランスボールなどを使おうとしてくれたけれどなかなか良い案がでなく、どうするかを考えて終わってしまった授業もあったから。なので100点とはいきませんでした。哲学やプロジェクトと同じで、あまり深めることができなかった。なぜなら、5段は飛べたが、次は6段を飛んでみよう、いや、跳ぶためにはどうすればいいかな? など問いを作って深めることができませんでした。それが一番の理由かもしれません…。

100点満点ではない理由

- ・トランポリンがなくてもできる練習法を考えていないから
- ・目標達成後、深めていなかった。

【写真4：B児の自己評価】

単元の最後、これまでの自分の活動をふり返り、点数をつけて理由を記述したものを共有することにした。A児とB児が作成した資料に着目すると、個々によってやっていることも、ふり返りの視点もバラバラであることがわかる。だが、その視点は、中間報告会で共有されたものだった。

A児は垂直に高く跳ぶことを自分のテーマとしていた。その中で記録がどのくらい上がったか、どの

ようにふり返ってきたのか、反省点も踏まえながら自らの点数の根拠をまとめている。

B児は自分の目標とする跳び箱5段を手を使わずに跳び越すという目標を達成した際に、次の挑戦課題を設定できず、問いを作って深めることができなかつたことを悔いている。また、用具について同じ学級のメンバーとどちらが使うかについて揉めてしまったことについても自らの点数を下げる要因と意味づけていた。

自分とは違う他者の学びと自己評価について知り、同じ空間で探究していた仲間に自分の感じた意見を伝えるという行為の中で、子どもたちは何を感じていたのだろうか。中には自分のことを辛口に評価する子もいたが、「それは点数低すぎるよ。もっと頑張ってたじゃん」や、「これだけ高く跳べるようになったんだからもっと点数をあげるべきだよ」とプラスの声かけが目立った。実際に仲間に声をかけられ、自分の点数を変更する子も何人かいた。

こういったプラスの声かけや自分とは違う視点で自己を評価した事例を共有することで、自分では気づかなかつた自分の新しい一面を知ることにつながつたのではないだろうか。

3. 実践をふり返って

中間報告会で出た「よい」学びの視点を見てみると、教師が学習評価の視点を提示しなくても、対話の機会を設けるだけで、子どもたちは自分たちの評価観を表出することができるのだと感じた。

だが、子どもたちの中で、ふり返るという行為の質にばらつきがあつた。だからこそ、互いの評価観に触れる機会が子どもたちにとって意味あるものになつたのではないかとも思う。最後の自己評価では自分がこれまで作成したデジタルポートフォリオを見返し、自分の学びを意味づけた。しかし、普段からのふり返り方に課題を感じている子も多くいた。そもそもからだの感じや気づきについて、言語化することの難しさもあるのだが、自身の活動をふり返り、自己を評価するという営みは、学習を自ら進める学び手には必要な行為であるように思う。

課題もあるが、自分のからだに向き合うという習慣が自己評価能力を高める上で重要であろう。また、他者と自己評価について語り合う場面を学習の半ばと終わりに設定することで、自分には気づかない新たな自分の一面に気づききっかけになったり、他者の学び方から学んだりすることもでき、自己評価能力の涵養につながると考える。

4. まとめ

この実践は2022年度の1学期に行ったものだが、年間を通して、自己評価について様々な取り組みを行なってきた。「中間報告」、「自己評価共有」を他のテーマでの学習においても続けていくことで、少しずつではあるが、自身の活動に意味づけすることができてきたように思う。

ふり返りの方法についても様々なものを試した。Google スライド、Google ドキュメント、Google フォーム、画用紙、記述式、動画、写真等、ふり返りの方法は多岐に渡つた。

その中でわかつたことは、子どもたちは必要以上に自分の感じたことや活動を記録していかないということだ。自分にとって必要感を感じないと記録する意味がない。つまり、自分の活動を一度立ち止まり、ふり返ることで自身のからだについての新しい発見があつたり、記録していくことそのものが考えていたことの整理につながつたりするというような、子どもにとって学習効果があつたという経験を積み重ねていくことが大事だと思う。よって、この「とぶ」という学習の中だけで、自己評価能力が育まれたと定義づけることは難しいと感じた。

だからといって、全ての学習において無闇矢鱈と活動の後に何度も学習についてふり返りを書かせればよいということでもない。子どもたちにとってふり返りたくなるような場面をができるように学習をデザインしたり、ふり返りを誘発するような声かけをしたりする教師の役割が重要なのだろうと強く感じる実践となつた。